

ロシア文化考第1部

ドクトル・ジバゴを語る

2007/11/11

文責：大江弘之

■あらすじ（新潮文庫版より要約） ○は関係する章を記載した。

(1) 時は19世紀末。主人公ユーリィ・アンドレーヴィチ・ジバゴ（愛称ユーラ）の母の土葬から話は始まる。ジバゴ家は地方貴族であったが、零落したのであった。父は行方知れずになっており、ユーラはニコライ叔父の手引きでグロメコ家（家長は化学教授である）に預けられることとなる。そこで共に育ったグロメコ氏の娘トーニヤとやがて結婚をする。ユーラは医師の資格を取る一方で詩を書き、それなりに評判であった。なお、ユーラはニコライ叔父の思想的影響を強く受けている。

(2) (3) (4) もう一人の主人公ラーリサ・フォードロヴナ・ギシャル（愛称ラーラ）はベルギー人技師を父に持ち、フランス人の母を持つ。ラーラの父は物語の当初から故人である。ラーラの母は父の友人であったという名士コマロフスキーに心身共に委ねてしまう。ラーラは美しく、聡明な女性に成長し、学業にも熱心に励む学生であった。また彼女は彼女に恋するパーシャと理想的な生活を歩もうと思っていた。だが、ある日コマロフスキーに手をつけられる。汚されることに憎悪を抱きながらも離れられずコマロフスキーを殺そうとするほどラーラは苦悩するが結局パーシャと結婚する。

(4) そして時は第1次世界大戦に。ジバゴとトーニヤにはサーシャという男の子が誕生するが、直後ジバゴは従軍医師として家族の下を離れることになる。時を同じくして、ウラルで暮らすパーシャはラーラを愛しながらもラーラが望む生活を送らせてやれないことに悩み、その解決として兵役免除すら投げうって志願兵として戦地へ赴く。彼は勇敢な戦いを繰り返し少尉まで昇進するが、ある日の戦闘で行方不明になり、その行方を追ってラーラも看護婦として戦地へ赴く。そして負傷したジバゴを看病することになるのであった。ここに二人共がお互いを意識することになる。その時二月革命が勃発する。

(5) メリューセヴォ（架空の地名）でジバゴとラーラは臨時政府から任じられた職につく。ジバゴはラーラの魅力に惹きつけられ、愛を語ろうとするも語りきれなかった。その内に二人は離れ離れになり、ジバゴはモスクワへの帰途につく。(6) そして数年ぶりにトーニヤとの再会を果たす。だが、すぐに十月革命が勃発し、モスクワで彼らは暮らしづらくなってしまふ。

(7) それにジバゴ自身が一連の社会的変動に乗り切れないでいたため、生きるためにウラル（ユリヤーチン：架空の地名）に移住することを決意する。汽車でユリヤーチンへ向かうが、ユリヤーチン手前でジバゴは運悪く、赤衛軍のストレーニコフの兵に誤って捕まってしまう。だがなんとストレーニコフとはパーシャのことであった。彼は敵の捕虜になった後、紆余曲折あり赤衛軍の将軍として生きていたのだ。 (8) 無事解放されたジバゴは家族と一緒に、遂にユリヤーチン郊外のワレイキノに到着する。

(9) 自活を中心とした充実した生活をしばらく送る。その間ジバゴは手記を書いている。その後ユリヤーチンの図書館で偶然にも勉強に励むラーラを見かける。そして彼女の住んでいる所をわりだし、ジバゴは彼女を訪ねるのであった。一度は離れ離れになった二人の再会。やがて二人は愛し合うようになる。それは同時にジバゴに精神的な苦痛を強いることになっていく。彼自身が彼が忌み嫌う凌辱者になってしまったのだ。一度はラーラとの別れを宣言するも、それは中途半端に終り、再度行こうとしたとき、パルチザンに医師として賦役するために誘拐されてしまう。

(10) (11) (12) 従軍中にもジバゴは様々なことを感じていた。もちろん家族のこともである。そしてある日彼はパルチザン部隊から脱走する。(13) 歩いてユリヤーチンに戻った彼はラーラの家へ赴いた。家の横のレンガをどけたその先には何と家のカギと彼にあてた手紙が入っていたのだ。それにジバゴは歓喜するが、疲労からか倒れてしまう。ラーラの賢明な介護のお陰で彼は順調に回復する。そして二人はラーラの娘カーチャと3人で暮らし始める。そしてある日、モスクワにいるとされていたトーニヤ達が国外追放されたことを知るに至る。トーニヤ達に会おうとしていたジバゴの気はここで衰えたのかもしれない。

ユーラはその詩風や思想が反革命的だとみなされており、ラーラは失脚したストレーニコフの妻であり、二人とも赤衛軍から狙われているのだ。それでも二人の愛と生活は変わらなかった。そのような社会の流れに彼らの愛は微動だにしないのだ。ユーラは詩作に没頭する。それでも権力の手は二人のすぐ間際まで迫っている。(14) そんな時コマロフスキーが二人の前に現れる。コマロフスキーはユーラ、そして何よりラーラの為に安全な場所まで逃がそうとしたのだ。だがすぐには二人は穢れた手を借りようとはしなかった。とはいえ、ラーラは母である。そのことに気づいたユーラはコマロフスキー

の求めに応じ、一緒に行くふりをしてラーラをコマロフスキーと一緒に行かせた。それが二人の今生の別れとなった。その後当局から追われていたストレニコフが突如、ジバゴの前に現れ一夜ラーラについて、革命について語り明かした後、彼は自殺したのだった。

(15) やがてモスクワへ帰ってきたユーラは徐々に墮落し始め、そんな中で3人目の妻マリーナと結ばれる。時は1929年になり、エヴグラフ・ジバゴ（ユーラの弟）の支援で再び詩作に取りかかり、病院勤めを再開し、息を吹き返そうとしたその朝、ジバゴは故障ばかりする電車内でかねてから悪くしていた心臓が苦しみだし、かつてメリュセヴォで共に暮らしていた老婦フレリー嬢が横を通り過ぎる中車外に出たところで絶命するのであった。(16) 話は第二次世界大戦に従軍したジバゴの友へと移りそこで終わる。

■パステルナークについて

本名ボリス・レオニードヴィチ・パステルナーク。1890年モスクワにて生まれる。父は有名な画家、レオニード・パステルナークであり、母はピアニストである。父はユダヤ系であったが宗教はキリスト教を奉じていた。彼がユダヤ系であるということは後の人生に大きく影響を与えたことは間違いないだろう。父は多くの著名人と交流し、彼らのスケッチをしていた。そうした中でパステルナーク自身もそれらの著名人との交流があった。一家としてはトルストイの影響を強く受けている。パステルナークの少年時代、彼は隣人の音楽家スクリャービンに強く影響を受け作曲家を志したが、自身の音楽的才能（絶対音感等）の欠如を知り挫折、モスクワ大学で法律を学び、ドイツのマルブルク大学で哲学を学んだ。1914年処女詩集「雲の上の双生児」を発表。その詩風はトルストイだけでなく、ブロークやリルケの強い影響を受けたようである。マヤコフスキーやツベタエフを称え親交を結ぶ。そんな中華革命が勃発し、パステルナーク自身不自由な活動を強いられる。翻訳が活動の中心となる。いずれも名訳として評判。スターリンの死後、あたためていた「ドクトル・ジバゴ」を完成させる。ソ連では発禁処分となり、その原稿はイタリアへ持ち出されミラノで出版されるに至る。たちまち大評判となり1958年度ノーベル文学賞受賞となった。ただ、ソ連当局の妨害もあり彼は最終的には受賞を拒否することとなる。そして1960年彼は生涯を終える。

■テーマごとに語る

この小説をいくつかのテーマで語ってみようと思う。

・「生」

ジバゴとは「生命ある」という意味であり、ドクトル・ジバゴとは「生命ある医師」という意味になる。これはこの物語を通底するモチーフとして「生」があることを暗喩しているといえるだろう。それは物語の冒頭がジバゴの母（母もジバゴという姓なのだから「生命あるもの」の死という意味になる）の埋葬から始まることから伺えそうである。

そのモチーフから眺めてみると浮かび上がってくる人物はラーラであろうと私は思う。ラーラはコマロフスキーに汚され、ジバゴと社会的には受け入れがたい愛で結ばれる人物であるが、その描写には「生」や「ロシアそのもの」といったニュアンスが感じられるのだ。まずはその部分を引用してみよう。

…下巻 P32

（神経質な風邪ひきの女性館員がラーラとの対話で風邪も神経質なそぶりも治ってしまったという）ちょっと感動的なこの一幕を、何人かの人たちは見逃さなかった。閲覧室の隅々から、好意と共感のこもった視線と笑顔が、ラーラの方にふり向けられた。ジバゴはこのほんの些細な徴候から、ラーラがこの町でよく知られ、愛されていることを、はっきりと確かめることができた。

…下巻 P122（抄）

だれもが生涯にわたってもちつづけ、一人の人間にとって、永遠にその内面的な顔、その人格そのものとなるように思われる原イメージがその原初の力をあますことなく保ったままジバゴの内部によみがえった。そして、自然をも、森をも、夕映えの輝きをも、いや、およそ目にふれるかぎりのものを、それと同じように本源的で普遍的な一人の少女（＝ラーラ）の姿に変えていった。

…下巻 P204（抄）

人生や生存と語り合うことはできないけれど、彼女（ラーラ）はそれらの代表、その表現であり、声なき存在の根源に賦与された、聴覚と言葉の能力なのだ。…彼女のすべてが完璧そのものであり、一点の非の打ちどころもない。

これらはラーラへの愛情を奏でたものと解すると同時に、ラーラが「生」のシンボルであることを意味するのではないだろうか。「生」が現実人間と化してジバゴの前に現れたのである。彼女はただ純真で華麗なだけでなく、汚れたものも体

験してきた。それでもその中で自分というものを透徹しようとする。そんな彼女は人間、さらには全生物の「生」と重ねられぬだろうか。このテーマを締めくくりにあたり、ジバゴが語る生きることについての会話とある情景描写を引用しよう。

…下巻 P43

人間が生まれてくるのは生きるため、生きる準備のためじゃない。それに人生というやつは、人生という現象、人生という贈りものは、それだけでもうわくわくするぐらい素晴らしいものじゃないですか！

…上巻 P416

道床の下の若木林はまだほとんどまる裸で、冬と変わらなかった。ただ枝々を一面に覆う蠟の滴のような固い芽の中だけで、何か余計なもの、秩序立たぬもの、いわば汚物とも腫物ともいえるようなものが生み出されつつあった。そしてこの余分なもの、秩序を乱す汚れたものこそが生命にほかならなかった。

・ジバゴの思想について

前のテーマでは「生」そのものを扱った。ここではそのテーマと関連させつつ、ジバゴ自身の人生に焦点をあててみようと思う。特に彼の思想に焦点をあてることにする。まずは彼を取り囲む人達から彼の思想を覗いてみることにする。

①ニコライ叔父について

あらすじでも書いたように彼は少年の時はニコライ叔父の影響を強く受けている。ここではまずニコライ叔父の思想について考えることにする。ただ、あくまで少年の時であって、物語が進むにつれてニコライ叔父との物理的距離と共に影響も弱まってきたといえるかもしれない。ただ、それはニコライ叔父の思想の否定に直接繋がるわけではない。

…上巻 P15

生あるものすべてのものは自分と対等だという貴族的感覚を身につけていた。母がそうであったように、彼もまたあらゆる事象をひと目で理解し、さまざまな考えを、それがはじめて頭にひらめいたそのままの形で、まだ生きており、意味を失っていない形のままで表現するすべを心得ていた。

…上巻 P20 (抄)

人間は歴史の中にこそ生きているという認識は可能である。そして歴史とはキリストによって創始され、福音書がその基礎となる。そして歴史とは死の謎に挑み、それを克服しようと努めてきた努力の確認である。その努力を進めるには精神的な武装が必要であり、その材料は福音書にこそある。具体的には隣人愛、自由な人格・犠牲としての生という理念である。

…上巻 P75 (抄)

福音書でもっとも大事なところは、キリストが実生活から取った譬え話のかたちで語りながら、日常の光で心理を照らし出しているところである。そしてその根底には、死すべき者たる人間同士のまじわりは不死であり、生は意味あるものであるがゆえに象徴的であるという思想が横たわっている。

ジバゴが二月革命後戻った時に再会したニコライ叔父は革命を肯定し、ポリシェヴィキに賛同しており、政治的な談論家の花形スターであることに満悦のようであった。このとき既にニコライ叔父はスイス（アルプス）に居を構え、他国の住人の様相を呈していた。十月革命後のニコライ叔父については直接的には書かれていないが、ジバゴとニコライ叔父の環境の違いを考慮するに私はジバゴとは異なった、すなわち革命賛成派であり続けたように思う。叔父についての言及が出てくるのは下巻 P234。

②その他の人物（作中に出てきた人物）

・グロメコ氏（トーニャの父親）

グロメコ氏が思想的にジバゴに大きく影響したとはいえないだろうが、両者がまたグロメコ氏とニコライ叔父が対話することは少なからずあり、互いに影響しあったことはあるだろう。

…上巻 P420 (抄)

（十月革命のようなことが）最初の純粹さを保ちつづけられるのは、創始者の頭たちの中でだけで、それも宣言の最初の日だけだ。次の日にはもう政治の詭弁がそれを裏返しにしてしまう。彼らの哲学はわしには無縁なものだ。彼らの政権はわれわれを敵としている。もうロシアでは私有財産の時代はもう終り、グロメコ家は利欲追求の情熱とは縁を切ったのだよ。

・まじない師（パルチザン部隊に抑留されていた時に会った人物）

・シーマ・トゥンツェワ（ラーラの友人）

シーマによるラーラへのお話という形で長く聖書について語られる。これについてジバゴは「ニコライ叔父さんの受け売りだけど頭のいい女性だ」と評価している。ここにニコライ叔父の思想の一端が書かれていると解釈してもよいだろう。

③医者であるジバゴ

ジバゴは早々から医学の道を歩むことにしていた。それは彼が芸術は生涯の職とするのは不向きであり、職業はあくまで社会的に有用な仕事をなすものにするべきだと考えていたからであった。彼は同時に物理学や博物学にも興味を示した。こうした事情が彼をして独特の考えを形成せしめる。ここではその核心部分を引用する。

…下巻 P127

もっとも進化した順応形態としての、意志的な適合の問題。擬態や模倣色や保護色の問題。適者生存、いや、ことによると、いわゆる自然淘汰という過程は、意識が生み出され、高次なものとなっていく過程そのものではないのかという問題。主体とは何なのか？ 客体とは何なのか？ 両者の同一性をいかに定義すべきなのか？ ドクトルの思念の中で、ダーウィンはシェリングと出遭い、飛びすぎた蝶は現代絵画、印象派の美術と出遭うことになった。彼は創造を、被創造物を、創造力を、そして創造の模倣としての擬態を考えた。

④本文からみるジバゴの思想

以上を踏まえた上でジバゴの思想を概観してみよう。なお、ここではその思想が発現された時期が重要であると思われるのでその注釈をつけている。

<第1次大戦中>

…上巻 P211 (抄)

（皇帝の『余と、余の剣と、余の民（ナロード）』という発言をめぐって）彼はいかにもロシア的に自然だったし、その種の陳腐な紋切型は悲劇的に超越しているのさ。だいたいロシアではその手の芝居がかったポーズは考えられないんだ。シーザー時代以後はナロードなんてただのフィクションでお題目にすぎない。…事実というものは、それに人間が自分独自の何かを、自由な人間知性の万分の一でも、何らかの神話にもちこまぬかぎり、事実ともなりえないんだ。

<二月革命起こる>

…上巻 P277 (抄)

ジバゴの頭を駆け巡る想念の二つの環について。一つは元々あったもの。例えば家族。以前の何不足ない生活についての思いであり、ほんの些細なディテールに至るまでその生活に不安な思いを馳せては、それが何の瑕もなく以前のままだに保たれているように念じたのであった。革命への忠誠、熱狂もこれに含まれる。それは中産階級が受け入れた意味での革命、1905年にブロークに傾倒していた若い学生たちが理解していた意味での革命であった。

もう一つは新しい環であり、全く異質のものであった。それは古いものによって準備された新しいものではなくて、意志に発したのではない動かしえない必然、現実には指示された新しいもの、突如として出現した衝撃的な新しいものであった。それは血なまぐさい戦争であり、アカデミックに観念化された革命ではなく、ポリシェヴィキに導かれている血なまぐさい革命である。

…上巻 P302 (抄)

自分がどれほど孤独であるかはっきり意識された。…友人たちは奇妙にくすんで、生彩を失っていた。だれ一人、自分の世界、自分の見解を持っている者がいなかった。…いったん下層者がのしあがってきて、上層の人びとの特典が失われてみると、今度はまただれもがなんと速やかに色あせてしまい、自分の独自の思想を惜しげもなく打ち捨てて、そんな思想など、もともとだれも持っていなかったのようふるまうことか！

→この見解は後の下巻 P319 においてジバゴが友人のゴールドンとドウドロフを評価するときとリンクするものであろう。

…上巻 P315 (抄)

（演説にて）革命がつづく間、諸君は、前線ではぼくらが経験したのと同様、人生が中断され、いっさいの個人的なものが存在をやめてしまった思いを味わわれることでしょう。…けれど、もしこの時代について記録を書き、回想録をものにできるまで生きながらえらしたら、そしてそういう回想記を読むことができれば、ぼくらは納得するはずですよ。この5年ないし10年の間に、他の人たちが1世紀かかって体験すること以上のことを、ぼくらは自身で体験したのだと。…壮大な

諸事件の原因をあれこれ詮索するのはしみつたれた根性です。そんな原因などあるわけがない。…真に偉大なものは、宇宙と同じく、その始まりをもたないのです。それは、どこから生まれてくるのではなく、いきなりぼくらの眼前に突きつけられる、まるで、つねにそうであったか、あるいは一朝にして天から降ってきたかのようにです。ぼくもまた、ロシアは世界がはじまって以来最初の社会主義の王国となる運命を担っていると考えます。

→こうしてジバゴは自分の生活・環境が崩壊寸前であることを認識し、見守っていた。

<十月革命起こる>

…上巻 P388

→ジバゴは農民は革命後人間らしい豊かな生活を送っていると考えている。これはジバゴの革命に対する認識とウラルへの移住の決意を探る手がかりになるように思う。この後にジバゴは線路の除雪作業という労働に従事することで満足感を感じ、目指すべき生活を自給自足に置いている。農民生活ではアカデミックな革命が目指したことが達成されたように思うも、都市ではそのようにいかない状況にジバゴは閉口しているだろうと私は思う。

…上巻 P432

(傷に悪いのにあくまで帽子を被り続ける少年に対し) 救いは形式の遵守にあるのではなく、形式からの解放にあるのだ、と (大声で叫びたかった)。

…上巻 P449

地方の有力者サムデヴァートフとジバゴのマルクス主義に対する対談。ここでジバゴは「マルクス主義ぐらい自己閉鎖的で、あれくらい事実から遊離している思想はほかにありませんね。誰も実践によって自己を検証しようとするものなのに、いま権力の座にある連中は、自分が誤りを犯すはずがないという神話を創ろうとして、真実から目をそむけることに汲々としているじゃありませんか。」と述べる。

<ワルイキノに到着後、パルチザンに誘拐される>

…下巻 P107～P110

パルチザン部隊にいる兵士の香袋の中にはロシア語風に、しかも誤りがたくさんある詩篇第90歌が書き込まれた紙片があったが、相手の白衛軍の兵士の香袋の中には原典の教会スラヴ語で同じ詩篇第90歌が書かれた紙片があった。ここでは心の中ではジバゴはわが身を顧みず突撃してくる白衛軍兵士に共感を抱くと述べている。

…下巻 P112

パルチザン部隊の司令官リヴェーリィとの対話。ジバゴは「ぼくは社会主義にもいろいろと変種があるという、その区別がぴんとこないのですよ。とりわけボリシェヴィキと他の社会主義者のちがいとなったら、皆目わからない。要するに、あなたの親父さんは、ここ何年来のロシアの混乱、動乱の因をなした人物たちの一人、つまり典型的な革命家気質の持ち主ですね。あなた同様、ロシアの新たな発酵素を代表する人物ですよ。(なのに何故父親を排除しようとするのか)」と述べる。

…下巻 P366 (抄)

ゴールドンとドゥドロフは、芝居がかった話しぶりがけっして情熱ゆたかな人柄の発露ではなく、むしろ反対に、人格の不完全さ、欠陥を示すものだという事に気づいていない。二人は良い書物、音楽、学者に囲まれていたが、それはあくまでつねに変わらずよいものに過ぎず、平均的な趣味への安住が没趣味にも劣る貧困だということがまるでわかっていない。二人がいう非難の言葉さえ、自由にものを考え、自分の思うままに会話を進める能力の欠如にこそ由来しているのにそれに気づかない。

ここでラーラとジバゴの対話の中でラーラから語られた個人と戦争・革命についての会話について言及する。

…下巻 P226～230

(パーシャとの結婚生活がうまくいかなかった理由をたずねられて) 戦争がいつさいの原因なのよ。戦争が始まる前は理性の声を信じて、穏和で罪のないゆったりとした生活を送ることが出来た。それが戦争が始まって以来個人の意見というものの価値を信じなくなってしまった。自身の道徳感覚に従って行動する時代は過去になった、いまはみなが一律に押しつけら

れる借りものの考え方（最初は帝政派の、次には革命派の）で生きていけなくちゃいけないという思いこみが広まった。そうした社会悪の風潮をパーシャは家庭の事情と取り違えてしまった。わたしたちの会話がごちなくなってしまったのは自分のせいと思ってしまった。自分の存在がわたしたちの負担になっていると思い、その負担から解放しようと戦争に行ったのよ。

戦争と革命という時代に、ジバゴはどう生きたのか。第15編終幕の冒頭を引用して、資料の紹介を終わりにしたいと思う。

…下巻 P339

さして混みっていないジバゴの物語も、もはや死を前にした最後の八、九年をあますだけになった。

■その他のテーマで考える

・ユダヤ人について

パステルナーク自身がユダヤ人であることは既に述べたが、小説の登場人物の中ではジバゴの友人ゴルドン（ミーシャ）がユダヤ人である。ここではゴルドン自身とラーラが語る一節を引用する。

…上巻 P213（抄）：ゴルドン

キリスト降誕後、複数の民族（ナロード）の存在など考えられるわけがない。神の王国には民族はもはや存在せず、個としての人格があるだけだ。そこでユダヤ人はその民族理念によって、何世紀もの間、民族としてのみあり続けるという動きの取れない宿命を背負わされてきた。ところがそうしているうちに、ユダヤ人の中から生まれた新しい力によって、この卑小な任務から解放されたのにもかかわらず、キリスト教的精神をみすみす取り逃がしてしまった。

自分から好んで背負い込んだ苦悩はいったい誰の為になるというんだ。そして何故凡庸な文士連中はユダヤ人に対して、安っぽい民族愛を説くのか。

…下巻 P49（抄）：ラーラ

わたしたちのように町に住んで知的な職業についていると、知り合いの半分はユダヤ人でしょう。だからポグロム（ユダヤ人に対する略奪、虐殺等）がはじまると、何か重苦しい、二重に分裂した感じにとりつかれるの。彼らに対する同情の半分は頭の中だけじゃないのかと思えてきて、後味の悪さをふつきれないのよ。

その昔、人類を偶像崇拜のくびきから解放してくれた人たち、いまは今まで社会悪からの解放にあんなにも多くの生命を捧げてくれている人たち、どうしてその人たちが、いざ自分自身の解放となるとまるで無力なんでしょう。…あの人たちがほかの民族の宗教をもっと理解すればいいのよ。たぶんユダヤ人があの無益な、破滅的なポーズをとるようになったのは、そして、あの人たちにとって災難のたねにしかならない、自己抑制的な内気な孤立主義に閉じこもってしまったのは、昔からの迫害や弾圧の結果だと思うけど、そのほかにもユダヤ人自信の内的老衰というか、何世紀にもわたる歴史の疲労感というかが、一つの要因として働いているのじゃないかしら。…老人が老いを、病人が病いを語るのと同じ、たまらないやりきれなさを感じてしまうの。

・革命勃発前と後のロシア社会の実情

貨幣や流通といった経済体制、交通、都市や農村の実態、文化、また政治体制はどうなったか。そうした実態について小説内での多少描写されている。貨幣は機能せず物々交換が進み、流通や交通もストップし、内戦が熾烈になった頃は配給もままならない状況のようである。そうすれば、自活手段を持たない都市が貧困にあえぐのは歴史的にみて想像に難くない。

・2つの大戦の評価

2つの大戦がロシアにおいてどう評価されるものなのか、それを考えてみたい。第1次世界大戦については上記のラーラの発言が材料となりそう。ここでは第2次世界大戦について語られた部分を引用する。

…下巻 P411

ゴルドン「（農業集団化といった）失敗を糊塗するために、あらゆる恐怖手段を動員して、判断し、判断し、考える力を人びとから奪い去ることが必要になったんだ。そこでいざ戦争が勃発すると、そのリアルな現実の恐怖、リアルな現実の危険といったものが、頭ででっあげられた非現実の非人間的な支配に比べると、まだしも救いと感じられた。…死の坩堝は同時に救済の坩堝でもあったんだよ。」

ドゥドロフ「戦争というのは、革命後の数十年間の連鎖の中の特別な一環だね。革命というものの根底に、本来的にひそんでいた要因が作用をやめたんだ。そこで現れてきたのは、うちつづく災厄のなかで鍛え上げられてきた性格の強さ、甘やかされぬ不屈さ、ヒロイズムどんな大胆な壮挙をもものともしない心構えなんだ。この資質こそ、新しい世代の道義的な精華をなすものなんだよ」

その他気になるテーマとしては「エヴグラフ・ジバゴとは何者なのか。」がある。

■映画から見るドクトル・ジバゴ

ラブ・ロマンスとしての意味合いが強いかもしれないが、それでもこの映画よく脚本が練られており、キューバ危機直後の冷戦下の中で作った名作であるといえる。デヴィット・リーンは彼なりにこの作品を素晴らしく表現したといえるだろう。鑑賞の一つの手段としてここでは紹介しておきたい。

【映画基本情報】

1965年公開 アメリカとイタリアの合作映画。アカデミー賞5部門受賞。本編200分。

監督は「戦場にかける橋」「アラビアのロレンス」で有名なデヴィッド・リーン。

ジバゴ役は「アラビアのロレンス」に出たエジプト出身の俳優、オマー・シャルフ。その他も豪華な俳優陣で固められているが、個人的に驚いたのはトーニャ役が女優チャップリンの娘であったということだ。

また、2002年にイギリスでテレビシリーズとしてリメイクされている。120分ということもあり、出だしが父親の埋葬から始まるという相当な手入れをしているようだ。

■ドクトル・ジバゴに寄せて

最後は火葬されてしまうジバゴ。それをラーラは惜しんだ。彼は教会で葬式されるべき人間であると。事実彼を慕うものは多かった。彼らはソヴィエト政権によってそれが発禁処分になっているのにも関わらず、彼の著作を愛読していた。彼はその詩風にも表れているように個人として生き続けたのであった。個人として観念的な革命を想起していたのだろう。それは個人的な善によるものであったのだろう。だがはたして現実に起きてみると、それは余りにも彼の想起していたものとかげ離れていたものであった。個人が自由に生きられない、血で血を洗うような凄惨な時代になってしまう。革命の指導者達は安っぽい言葉で民衆を扇動する。そんな中でも彼はあくまで個人として生きようとする。そして同時にラーラ、それが象徴するロシア全部を愛していたのだろう。彼はその名の通り、生とは何かを我々に考えさせる存在である。革命の中での個人。（ここでいう個人とはキリスト教的な個人の概念であろう。そこには当然日本人のいう個人の概念との共通点もあるが、相違点もあるだろう。この点には注意すべきだろう。）こうした個人と国家といった政治主体との関係は西欧近代的な一つの大きなテーマである。ジバゴの生き方は社会的視点から見たとき必ずしも許容されるべきものではない。一方でかといって自己閉鎖的な生き方であったかということでもないだろう。ジバゴの生き方は個人に留まらないところの「生」を考えさせるものだ。これは現代でも通用することである。

それにしても、パステルナークやブロークといった詩を鑑賞するために、やはり原典で読みたいものだ！

■参考文献

ボリス・パステルナーク著 江川卓訳「ドクトル・ジバゴ」上下巻 新潮文庫 1989年4月

ボリス・パステルナーク著 工藤幸雄訳「パステルナーク自伝」光文社 1959年9月

アレクサンドル・ブローク著 小平武訳「ブローク詩集」彌生書房 1979年5月

ロシア考第2部

ロシアのプーチンとプーチンのロシア

1. 旧ソ連崩壊からプーチン政権誕生まで

ーゴルバチョフのペレストロイカ

ソ連型社会主義体制の歪みが如実に表れた70年代後半から80年代前半。若きエリートゴルバチョフはペレストロイカ、グラスノスチを始める。それは世界に大いに影響し、彼はブッシュ元大統領と冷戦終結の宣言をするにいたり、ノーベル平和賞を受賞した。

ーゴルバチョフの失脚からエリツイン台頭（秩序の崩壊へ）

以上の改革からゴルバチョフはソ連を立て直そうとした。しかし、現実逆行した。民主化の波がソ連的秩序を崩壊させたのだ。ゴルバチョフは体制維持の為に人民代議員大会の議員の一部を民主選挙で選ぶといった改革を進めたが、それが大衆人気を博する政治家：すなわちエリツインの台頭を許すことになった。ゴルバチョフの改革とソ連の維持という姿勢により彼は保守派とエリツインら急進改革派の間に挟まれた。91年8月には8月クーデターが起こる。そして東欧が続々と社会主義体制が崩壊していく中、91年12月ロシアがウクライナらとCISの設立を提言し、遂にゴルバチョフは最初で最後のソ連大統領の職を辞することとなった。ソ連は崩壊したのだ。

ーエリツイン改革の明と暗

ロシア共和国大統領のエリツインは手始めに価格自由化をガイドル内閣に推進させる。それによってソ連の物不足時代（＝行列の時代）とうってかわって市場には物があふれるようになった。だが、それを多くの市民は買うことが出来なかった。高すぎるのだ。最初の一年で物価が2600%も上がった。それは一つには議会との確執で思うように改革が進まなかったことがあるが、急進すぎたのだった。またそうした急進的な改革は議会との確執を生んだ。対立は激化、一方的に解散を通告された議会側はクーデターを決行する（モスクワ騒乱）が、エリツインは何と戦車を動員して、クーデターを制圧。新憲法を制定し、自らの権力を磐石な物にした。だが、ハイパー・インフレとモスクワ騒乱、さらには第1次チェチェン紛争での撤退の中でエリツインの原動力である大衆支持は失われていくのであった。

そこでエリツインは再選の為にオリガルヒ（新興財閥）の支援を受けることにした。彼らはソ連崩壊後の混乱期、ハイパーインフレを利用してのし上がった者達である。そのお陰でエリツインは再選を果たし、結果オリガルヒ達の政治的影響力は増すことになった。エリツインは体調悪化の為に自ら陣頭に立つことが減り、ますますオリガルヒ達の暗躍を許すことになる。そうすると、起こるのは権力闘争であった。権力を奪取しようと反エリツインやオリガルヒ排除を掲げる人々は「出る杭は打たれる」方式で政権から追い出された。2期目においては首相など閣僚はめまぐるしく変わっている。

ープーチンへのバトンタッチ

（プリマコフ首相の介入が噂される）スクラトフ検事総長によるエリツインの汚職追及が激しさを増す中、それを押さえたのが当時連邦保安局長官だった、ウラジミール・プーチンであった。政治危機を乗り越えた彼は後に首相となり、アパート爆破事件を契機にチェチェンに対し、「テロリストは殲滅する」と述べ第2次チェチェン紛争に踏み切る。そうした姿勢はプーチン人気を高め、1999年12月31日に辞任したエリツインの後を受け第2代ロシア共和国大統領に就任するのである。

※チェチェンとの関係

ロシアの政治を考えるにあたり、チェチェンは大きな位置を占めている。それは地政学的にももちろんいえることだが、政治力学的にも大きな影響を与えている。エリツインはチェチェン撤退という形で自身の人気、権威を落としたし、プーチンは逆にチェチェンの人々をテロリストとして、正義を掲げることで自身の人気、権威を上げたのであった。9・11の後のプーチンの対応を見ても、その政治性を伺えるだろう。こうしてみるとチェチェン問題は民族問題であると共に政治問題であることがわかり、安易な考察は事態の正しい把握を阻害すると思われる。

2. プーチン政権の内面

・プーチンの経歴

1952年10月7日生まれ 国立レニングラード法学部卒

彼はKGB出身である。1985年には東独に着任し、東欧民主化の波をその目で見つめた男である。冷戦終結宣言後、レニングラード（今のサンクトペテルブルク）に戻った彼は市のソビエト議長をしていた大学時代の教授の下で内務官僚として（KGBにの予備役でありながら）働くことになった。そこでの実績をかわれ、クレムリンへ。そして、大統領への道を進んだのだ。彼の官僚としての評価は忠誠心が高く、冷静でもあったということだった。

・共産主義的秩序の崩壊から資本主義への移行にあたる国内の混乱から秩序形成へ

これは私がこの発表において主題におきたいことであり、一番興味のあることでもある。ソ連の崩壊によってソ連型社会主義は文字通り崩壊した。その後10年弱、エリツィン政権下では長く混沌が続いた。そしてプーチン政権となった。彼の年で年金支給が再開されたり、天然資源の有効利用が進むなど国内経済は改善の方向を示している。資源価格高騰もあり、ロシアの経済力は飛躍的に増している。プーチンの目指すいわば強いロシアの復活という目標もある程度達成できている。天然資源等を利用した外交的駆け引きの中でロシアのプレゼンスが再び増大しているのは明らかだ。プーチン政権の下ロシアは再び秩序を取り戻しているといえる。だが、その秩序は前の秩序ではない。システムもヒエラルキーも違うのだ。たかが10年足らずの話であるから、変化していない部分も多い。だが、違った部分も多いはずだ。ソ連時代は物不足とはいえ、人々は食べ物を手に入れることが出来た。だが、今はそうではない。そうした体制の転換で没落する人もいれば、一方での上がる人もいる。その一つがオリガルヒである。90年代の無秩序の中、彼らは金の力でマフィアや官僚を動かす、自らの力を高めていった。ここでも汚職は相変わらず常套手段である。そうした実情を書いた本が「プーチニズム」なのである。それぞれの事象は個人的なものも多く、そのまま政治考察に生かすのは難しい。だが、本に出ているような事例から今のロシアの体制がどうなっているか、すなわちどう秩序が形成されていっているのかを知ることは出来、まさにそれがロシアの政治を考察する鍵となるのではないかと思う。

さらに言えば、秩序の崩壊から形成という流れは世界史を見れば何度も起きたことである。そうした秩序の転換によってどういったことが起こるのか、これは世界史的にも社会科学的にも大いに興味のある事柄である。革命はうまくいくものなのか。我々は現状の不満だけでなく、その先を見据えねばならないだろうと考える。とはいえ、今のロシアとロマノフ王朝は違うということも認識せねばならないだろう。

・ポスト・プーチンもプーチン？

2007年8月27日～現在に至るまでロシア政治について扱われた記事から断片的ながらロシア政治の動きを見てみたい。

・9月7日 捜査委員会（SK）始動

ロシア版FBIと言われ、治安当局の綱紀粛正を断行することが最大の狙いとされる。委員長はレニングラード国立大学法学部でプーチンの同級生だった人物である。SKは不逮捕特権を持つ上下両院議員や判事への捜査、逮捕権限が付与されるなど強力な権限を持ち、KGBの復活だともいわれている。

9月12日 フラトコフ内閣が総辞職

フラトコフ内閣はこの重要な政治的季節において大統領が適切な態勢を構築できるように、とって総辞職した。後任はズブコフ氏。

■私見（ロシア政治）

ロシアについて詳しくはない私がロシア政治について述べるのは大変億劫ではあるが、簡単に私見を述べたい。9月12日に内閣が総辞職した。SKも含めプーチンの人脈内の人物がここにきてさらに登用され、権力基盤は議会はもちろん、政府内でも着々と築かれつつある。さらには、大統領辞任後の首相就任も「現実的な提案だ」とし、プーチンの力はしばらく衰えそうも無い。民主主義といわれている国では信じられないような展開ではあるが、それが成立する所に※1ロシアの特徴があるのかもしれない。事実、ロシアはプーチン政権下で経済発展しているし、国際政治上のプレゼンスも増大していると言えよう。プーチンがロシアを強固にすることに一役買っている以上、しばらくこの勢いは変わらないかもしれない。ただ、不変が続く以上そのひずみも大きくなる恐れもあり、政権運営には細心の注意を払わねばなるまい。

※1 こうした状況を見ると、ついつい司馬遼太郎「ロシアについて―北方の原形」内のロシアの本質に対する言及が思い出される。こうした文学的な考察ばかりを社会科学の世界に持ち込むのはある種の反発を招くだろうが、少なくともこうした考察を個人的に想起すること自体には意義があると思う。であるから、プーチンのような存在やプーチンを大統領とするロシア連邦にも司馬氏のいう北方の原形が見出されるのではないかと思う。

3. 国際情勢（プーチン政権の外面）

・対欧州・中央アジア

ロシアは建国以来、ずっと西に向いていたといえる。それは今とて例外ではない。今はNATOや資源という形で関わっている。天然ガスの埋蔵量の4分の1がロシアにあり、欧州はその天然ガスを中心にロシアにエネルギー資源を依存している。ロシアはそれをてこに外交を展開している。特にウクライナやグルジアに対しては石油や天然ガスの輸出をストップするなどの資源的圧力をかけた。旧ソ連加盟国に対してはロシアは影響力保持を狙っているといえるだろう。中国との国境紛争についてはカザフスタン等の交渉においてロシアが参画することがあった。

・対アメリカ合衆国

たかだが20年もない冷戦後の中で最悪といわれる米ロ関係の中で7月1・2日に行われた会談は、両国のとりあえずの関係の維持を確かめるものであった。それはアメリカがイラク戦争の失敗により、未だ世界最強の軍事力を有しつつもロシアと友好関係を保たざるをえない状況にあるからだろう。アメリカ合衆国のMD構想がどうなるかは今後の交渉を見守る必要がある。アメリカの覇権がもはや名実共に失われつつある今、ロ米交渉を見ても多極化の様相を伺い知ることが出来よう。そして、アゼルバイジャンやイランといったロ米を考えた時に緩衝国となりうる国々は、まさにグレートゲームの現代版といった形で外交的駆け引きの対象となっている。この一帯は宗教的にも地政学的にもさらに注目すべき地帯となっている。ロシアはそうした点でイラン寄りの政策を展開している。

※参考資料（朝日新聞 2007年6月7日朝刊）

■資源をめぐるロシアと他の主要国との最近の摩擦など■

- 06年1月 ロシアがウクライナ向けの天然ガス供給を停止
 - 7月 サンクトペテルブルク・サミット。議長国ロシアがエネルギー安保議論を主導
 - 9月 ロシアが「サハリン2」について環境問題を理由に承認取り消し
 - 11月 英国亡命中のロシアの元情報将校がロンドンで毒殺される
- 07年1月 ロシアとベラルーシの対立で、ベラルーシ経由で欧州に向かう石油パイプラインの送油が一時停止
 - 同月 ロシアとイランの間で「ガス版OPEC」創設構想が浮上
 - 5月 IEA閣僚理でロシアでの資源ナショナリズムの高まりに批判噴出
 - 6月 米国が欧州にミサイル防衛施設を配備した場合の対抗措置として、プーチン大統領が「ミサイルの照準を戻す」と発言
 - 同月 東シベリアの「コビクタ・ガス田」の事業認可取り消しをロシアが示唆

4. 日本との関係

・北方領土

日露国境策定から太平洋戦争、日ソ共同宣言。

紆余曲折の日ソ、日ロ交渉。

「フィフティ・フィフティ」式決着。

・資源問題

日本にとって資源の調達は死活問題である。これはずっと日本に付きまとう問題だ。安定した供給が望まれるが、未だ現状は不安定である。日ロの資源問題で一番話題なのはサハリンプロジェクトであるが、1も2もロシアの資源ナショナリズム的行動が目立っている。まず1については、主に日中どちらへの輸送を優先するかといった問題があり、中国優先でことが運んでいたが、そもそも事業主体がエクソン・モービルからガスプロムへ変わり、中国輸出すら怪しくなってきた。サハリン2でもロイヤル・ダッチ・シェルや三菱商事、三井物産が事業主体として資本提供をしていたが、相次いで環境アセスメントを理由に中断されたりし、結局ガスプロムに全面委譲の形になっている。

■参考文献

プーチン（新潮新書 054） 著：池田元博 2004/02

北方領土問題（中公新書 1825） 著：岩下 明裕著 2005/12

プーチニズム - 報道されないロシアの真実 - 著：アンナ・ポリトコフスカヤ 訳：鍛原多恵子 NHK 出版 2005/06

SANKEI EXPRESS、朝日新聞朝刊